
悪意を持って、殺してやろうと思った。

のりまき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪意を持って、殺してやるつと思つた。

【著者名】

「8098」

【あらすじ】

数学の教師を好きになつた生徒の話。

しなやかな指を差し向けられ、体の芯が跳ね上がった。張り詰めた空氣で硬直していったわけでもない。咄嗟のことで驚いたわけではない。弛んでいたピンク色の糸が一気に張つたのだ。

明彦にとつて、こんな気持ちのは初めてだつた。

肌寒い季節を通り越し、ただ寒さだけが体に突き刺さるようになつた。その気温を運んでくる風が、校庭の木にぶつかつているのを、明彦は窓越しに見る。

不意に口をついた溜息が語つたのは、国語の時間なんかに興味はない、ということだつた。

これまで生きてきた十七年間で、一度も味わつたことのない感情に襲われたのは、高校に入つて間もない、数学の時間だつた。

「笛本、次のところの読んでみる」

「こんなおっさん教師に指を差されたつて嬉しくないよ。

溜息交じりの返事が彼の気に触れるかどうかなんて、明彦にとつて知つたことではない。

素つ氣無い棒読みではあるが、支える」ともなく読み進められていく声に、国語の教師は満足そうにした。

彼の合図で腰を下ろした明彦は、再び窓の外に視線をやる。

運動にはそれほど自信が持てないが、頭の方は冴えていた。実技以外の教科はどれをとっても申し分ない。ただ、数学を除いては。数学だけは格別できない生徒だった。確かに、数学の時間は好きだし、数学自体も好きであるが、成績を上げよつとは思えなかつた。

あのしなやかな指に差されてから、明彦は数学の勉強を怠つた。

「他の教科はできるのに……数学つて、そんなに難しいかしら？」

そんなことを聞かれたつて、答えに戸惑つだけじゃないか。

人差し指を艶美な唇に当て、悩む表情を見せる彼女。その目の前で閉口する自分を思い出し、明彦は再び憤慨した。

田の前の見えない壁が、窓ガラスのように薄つすらと自分を映し出した。そんな映し作られた虚像なんて見たくなかった。

明彦自身を映し出した、教師と生徒という間にある壁。ぶち壊してやりたいその壁が、邪魔で仕方なかつた。

そんな壁さえなれば、彼女を悩ましている理由を言葉で伝えられたかもしれないのに。

つまらない国語の時間は、窓から外を眺めているだけで過ぎ去つてくれた。それだというのに、わざわざ彼が近づいてくる。

真面目で気前がよく、生徒からの信望も厚い教師だ。それでも、顔がいけ好かない。

「よひ、 笹本。 お前、 最近数学頑張つてんだってな。 先生、 壊めてたや。 一年のときは本当に成績がよくなかったみたいだしな。 何かあつたのか？」

「数学だけできなんて、 格好付かないじゃないですか」

「んなやつの言葉なんてどひでも良かつた。

どひでも良かつたけれど、 やつぱり顔がいけ好かない。

笑みを向けてくる彼の許から、 明彦はすぐに離れたかった。 話なんて尚更だ。

どんなに他の生徒以上によく接してくれよひとも、 明彦の気持ちは変わらない。 窓に映る虚像と同じよひに、 じの男に憤りを感じるのみだ。

数学の成績を上げるきっかけを作ったあの時から、 明彦の感情は揺らぐことがなかつた。

満足そうな笑みで背を向ける彼を。 窓に映る自分の虚像を。 しなやかな指を差し向けた彼女の美を。

明彦は、 悪意を持つて、 殺そつと思つた。

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098j/>

悪意を持って、殺してやろうと思った。

2011年1月15日20時28分発行